

千葉大学『人文研究』第29号（2000年3月）抜刷

〔論 文〕

n グラム統計処理を用いた文字列分析に
よる日本古典文学の研究

— 『古今和歌集』の「ことば」の型と性差—

近 藤 みゆき

n グラム統計処理を用いた文字列分析 による日本古典文学の研究

— 『古今和歌集』の「ことば」の型と性差—

近 藤 みゆき

1 はじめに—検索利用から計量分析へ—

日本古典文学のデータベース環境は、ここ数年、急展開を遂げている。1990年に完成した長瀬真理の「日本語—英語対照「源氏物語」のテキスト・データベース」⁽¹⁾を先駆的業績として、その後、CD-ROMやオンライン⁽²⁾において、各種の古典籍データベースが公開されてきた。特に1999年には、4月に国文学研究資料館による日本古典文学本文データベース（実験版）試験公開の開始、7月に国文学研究資料館データベース古典コレクション『十一代集〔正保版本〕CD-ROM』、『源氏物語（絵入）〔承応版本〕CD-ROM』⁽³⁾の刊行、下半期には『角川古典大観 源氏物語』CD-ROMが刊行⁽⁴⁾と、大型の企画が相次いで完成・公開を見ており、国内の研究者にとっては古典文学研究のためのデータベース環境の基礎は、和歌および仮名散文の分野では、ほぼ固まったといってよい。こうした環境の充実は、近年の研究に着実に反映しており、特に和歌の分野では、1996年の『新編国歌大観CD-ROM版』⁽⁵⁾の刊行以後、歌ことばの研究、あるいは歌人同士の表現摂取の様相などに焦点をあてたような研究は、用例の博搜という点において、精密の度を加えてきた。歌風論・歌人論のいずれにおいてもデータベース化の促進がもたらした成果は計り知れないと言えるだろう。だが、しかし、用例検索を徹底した研究の増加が、一方で、和歌の表現研究にある種のステロタイプ化をもたらしつつあることも、現在、私を含めて多くの研究者が抱く所感に違いない。テキストデータベースの活用が、「用例を検索する」という、いわば研究の補助手段にとどまる限り、表現研究のあり方も固定的になり、

やがては歌語研究や表現研究自体の魅力の低下を引き起こすのではないかという危惧もまた、少なからず抱かれるのである。補助手段としての検索利用とは別に、言語と文化のデータの集積ともいべき文学作品を計算機によって総合的に分析研究することを目指し、そのために日本の古典文学作品の分析に適した方法やツールそれ自体を検討する研究が、和歌研究者自身の手によって、開始されるべき時期に来ていると言えるのではないだろうか。特に、前述の国文学研究資料館の公刊データに代表されるように、利用者側が如何ようにも加工出来るフルテキストデータベースの提供が本格的に開始された事は、そうした時代の到来を予感させる。情報処理研究のサイドではすでに、古典和歌を対象として、データ分析という観点からの研究が始まっている。山崎真由美(6)、竹田正幸(7)らの共同研究がそれで、最長共通部分文字列(LCS)や最小記述長(MDL)方式といった方法によって、類似歌や特徴パターンの自動抽出を可能にしようとするもので今後の進展が期待されるが、残念ながら現段階では和歌研究者側にはあまり知られるに至っておらず、実際の和歌研究でどう展開されるかはこれからの課題であろう。

本稿は、和歌研究者の立場から、平安和歌研究の一環として、古典和歌研究のデータ分析の方法を新しく提案し、あわせて、それによった研究を試みるものである。新しく提案する分析法とは、nグラム統計処理とUNIXの標準ツールcommを組み合わせた文字列総比較によって表現の種々相を分析する方法であり、またそれによって試みたい研究とは、性差からみた『古今和歌集』の「ことば」(歌ことば・表現)の分析である。

ここでまず、『古今和歌集』の「ことば」(歌ことば・表現)を性差の観点から考察することの意義、またそれを特に計量分析によって行うことの意義について述べておこう。和歌という表現形式の特質の一つに、それが一人称の言語表現であり、かつ作品内に仮構された性も含めて詠歌世界において主体となっているものの性—男性の歌であるのか、女性の歌であるのか—を、大きく反映する文学様式であるということがある。折口信夫以来多くの論者が重ねられている「女歌」論は、この問題をめぐる研究を代表するものだが、近年、特に平安和歌では、後藤祥子の「女流による男歌—式子内親王歌への一視点」⁽⁸⁾によって大きな問題提起がなされた。後藤の論は「女流による男

歌」という、発想を転換した観点で古今から新古今時代までを縦断して分析することで、従来「女歌」側に集中していた問題を相対化し、詠歌世界における性の倒錯や錯綜が、代作・題詠・物語取りなどの和歌史的諸問題といかに切り結ぶかを鮮やかに分析してみたものであって、式子内親王の代表歌「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする」を源氏物語取の歌で、しかも男の立場（作中の柏木）の恋を歌ったものとするかつて無い結論とあわせて、多くの反響を呼んだ⁽⁹⁾。同論は、詠歌世界での男装の式子という、センセーショナルな指摘もさることながら、論証過程において、たとえば「忍恋」の詠み手は古今以来圧倒的に男性であることを明らかにするなどといったように、古今以後の和歌世界に「男歌」という発想・表現の型があるということ、いうなれば和歌の発想や表現に潜む「男性性」という問題を、具体的に浮かび上がらせることになった点でも、斬新かつ従来にない着眼を提供するものであったと思われる。時に男性歌人が擬装する「女歌」という型があり、一方で女性歌人が、代作として模倣したり、題詠世界で成り変わってみせ得る「男歌」という型があるのだとしたら、平安期の人々は、その位相差をどう認識していたのだろうか。そもそも彼らが「王朝和歌」という表現形態において、共通に認識していた性差の「型」の枠組みとはどのようなものだったのだろうか。歌の「型」とは、言うまでもなく、「ことば」によって形成される。そこで本稿では、「ことば」に密着してこの課題について考えてみたい。具体的対象とするのは、以後の王朝文学の「ことばの規範」となり、広い意味での王朝の表現文化の基盤でもあった『古今和歌集』である。恋歌だけではなく、四季、羈旅など歌の領域全体に範囲を広げ、この『古今和歌集』において、性差が、表現や発想をどう規定していたのか、男性の言葉と発想の型・女性の言葉と発想の型との関連から、その「ことば」の型を明らかにすることを目指してみたい。特に、『古今和歌集』では、1100首のうち、作者名などから女性の歌と確実に視出来るのは87首を数えるに過ぎない。和歌が、対漢籍という意味においていかに女性的契機を持つ文学形式であるにしても、「古今的表現」とは、その意味で、紛れもない男性の形成した文化的言語表現に他ならない。そうした男性の視点は文芸としての和歌にどう反映し、またこれを機制したのか、従来の女歌論の立場だけにとらわれず、

後藤論の示唆するところから、更に展開すべき問題は多々あると考えられるのである。

それにしても、平安時代の言葉や表現を、個別例に即して男性性・女性性の観点で判別していくことは、容易なようでいて、実は全く容易ではない。山口仲美は、客観分析に徹する時、『源氏物語』作品中から、「女性語」「男性語」を、網羅的に識別・抽出することが、いかに困難な作業でもあるかを述べているが⁽¹⁰⁾、『古今和歌集』において、男性が頻繁に用いるのに女性には用例がない表現を、いくつか具体的に示せと問われたとき、たとえ熟達した和歌研究者をもってしても、主観で即答することは難しいだろう。語感・ニュアンスというレベルにおいて、平安和歌とは、現代語の話者としての我々研究者にとって内省のほとんど通用しない領域であるという立場を一旦は取るべきであろう。そこで内省に代替する、あるいは内省を超える客観分析に適した手段として、有効と考えられるのが、和歌のフルテキストデータを計算機で分析する計量分析である。以下では、私に作成した『古今集和歌』のテキストデータベースを対象に、新しく提案する分析方法によって、男性歌人・女性歌人のそれぞれの性別に語彙・類句・句法などを抽出し、それぞれが多く用いている語彙や表現、また一方が他方に比して多く用いている語彙や表現を網羅的・計量的に抽出することからはじめてみる。以下、論の前半では、統計処理のツールと方法の提案を行い、後半で計量結果に基づく考察を行うこととする。

2 文字列分析の提案—nグラム集合演算法—

2.1 nグラム統計処理と長尾・森プログラム

ことばの型に、性差はどう反映しているか。古今時代からすでに男性が女性の立場で詠んだ歌がある、とはよく知られた事実だが、性差とことばの関係の基本ラインを把握するためには、やはりひとまずは、古今集歌のすべてを、男女それぞれ作者表記に指示された通りの性別に基づいて振り分け、それぞれの語彙・句法・表現などを使用頻度も併せて網羅してみる事が第一で

あろう。特に古今集の場合、男性とも女性とも性別の判断できない「読人不知」の一群があるので、これも一つの位相を成すものとして区別すると、全体を男性・女性・読人不知の3つに分けて比較することが必要となる。ではその3つの位相を比較して、それぞれ多く用いている語彙や表現、また一方が他方に比して多く用いている語彙や表現を計量的に網羅・抽出するには、どのような方法があるだろうか。語彙を比較するだけであれば、男性歌人歌、女性歌人歌、読人不知歌にデータを3分類し、形態素解析—いわゆる総索引作成のための品詞分解作業—を行って、語彙の出現頻度をとり、比較していく方法などもあるのだが⁽¹¹⁾、それでは語彙以外の、たとえば「恋もするかな」のような、より長い言い回しや表現をうまくすくい上げる事は出来ない。そこで、本稿が、まず取り上げたいのが、形態素解析による分析とは異なる方法、すなわち情報処理研究で開発された文字列単位での分析方法である。そしてそのための汎用性の高い日本語分析方法として、ここで注目したいのが、京都大学の長尾真・森信介（現日本アイ・ピー・エム東京基礎研究所）両氏の開発した日本語語句の自動抽出プログラムである⁽¹²⁾（以下、長尾・森プログラムと称する）。

文字列単位での分析は、古典文学研究の分野ではなじみが無く、応用した前例を聞かない。長尾・森プログラムは、シャノンの情報理論において展開された言語分析のための理論であるnグラム統計⁽¹³⁾を、日本語の大規模テキストに対して高速で行うためのプログラムとして開発されたものであるが、文学研究者にとってはいずれも新しい概念であり、はじめに、このnグラム統計および長尾・森プログラムについて概観しておきたい。

まず、nグラム統計とはテキスト中で任意の長さの文字列を抽出し、その出現頻度を求めるものであり、言語の種類を問わず適応可能なものである。ここでは、やや煩瑣になるが、古今集の次の一首を例にとって、その文字列を抽出する仕方について説明しておきたい。

としのうちにはるはきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ

「nグラム (n-gram)」とはこの場合「n文字」の意味であるが、まずn =

1すなわち、1グラム（1文字）の場合を例にとる。1グラムの場合は、上記の歌の頭から1文字ずつ場所をずらしながら、1文字単位で取り出すので、

と し の う ち …… や い は む

のように31個の文字が抽出される。次に、同様に2グラム、すなわち2文字の場合には、同様に1文字ずつずらしながら、こんどは2文字単位で取り出すので、次のようになる。

とし のう うち ちには …… しと とや やい
いは はむ

このように、30種類の2文字単位の文字列を取り出すことができる。同様に3グラム、4グラムでは、次のようになる。

としの しのう のうち うちにはる はるは るはき ……
やひは いはむ
としのう しのうち のうちに うちには ちにはる ……
とやいは やいはむ

このグラム数は理論的にはどこまで大きくすることも可能であるが、この場合は、もとのテキストである和歌の一首の長さである31グラムが一応の上限となる。また、取り出した文字列が、研究の上で何らかの意味があるものでなければ抽出する必要もないことでもあり、多くの言語研究では数十グラム程度まで抽出すれば十分であろう。

このようにして抽出された文字列には「のう」「ちにはる」のように全く無意味な文字列も含まれるが、同時に「とし」「いはむ」のように単語や文節として意味のある文字列も含まれる。しかも、単語や文節だけではなく「としのうち」あるいは「はるはきにけり」のような句や言い回しもすべて含まれることが重要である。

さて、抽出した各グラム of 文字列において、上記の例では、2 グラムでは「いは」「とや」がそれぞれ 2 回出現し、また 3 グラムでは「いはむ」が 2 回出現する。一首だけでなく、例えば、古今集全体の和歌について同じ作業を行った場合には、同じ形の文字列が複数回現れる例が多くなるのが容易に予想されるのであるが、このようにして各グラムごとに、同じ形の文字列が何回出現するかの頻度を計測することができる。このようなことを n グラム統計と称するが、これによってその作品の中の文字列の現れ方について、どのような文字列が高頻度に出現するかの調査を行うことができるわけである。先に述べたように、文字列には、単語・文節・慣用句・長い言い回しなどのすべてが網羅的に含まれるのであるから、n グラム統計は、そのテキスト全体についての網羅的な情報を含むものとなるわけである。

ところで、n グラム統計は、上記のようにきわめて機械的な処理ではあるが、たいへんな手数を要するために、ある程度以上の大きさのテキストになると、これを手作業で行うことはまったく不可能となる。また、コンピュータを用いても、大規模なテキストデータの場合は相当な計算時間を要するために、この統計を人文科学的な研究に応用した例は従来まったく存在していなかった。

ところが、本研究で利用した長尾・森プログラムでは、特殊なアルゴリズムによって、この計算時間の問題を解決し、日本語の大量データについて、任意の n グラム統計を極めて高速で求めることを可能とした。両氏の研究では、現代語の大量データを分析し、単語的文字列を自動抽出した結果についての例が報告されているが、この長尾・森プログラムによる統計の利点を、私の立場から、簡潔にまとめると次のようになるであろう。

- ①大規模テキストに対して、きわめて高速に分析が可能であること。
- ②形態素解析（単語への分解作業）をまったく必要としないこと。
- ③n グラムの n の値を任意に設定できること。
- ④よって、プレーンなテキストから語彙を含むさまざまな文字列を抽出することが可能であること。

本研究ではこれを平安時代和歌資料のデータ分析に応用してみる⁽¹⁴⁾のだが、それが従来の形態素解析によった分析とどう異なるのか、その具体的に意味するところを、次に、実際に今回行った古今集のデータ分析によって追っていくこととする。

2. 2 『古今和歌集』をnグラム分析する

まず、上記の「②形態素解析（単語への分解作業）をまったく必要としない」についてだが、従来、古典文学で一般的に語彙分析を行う場合には、単語に分解する作業がかならず必要で、データベースで計量化する際にも

0001 とし/の/うち/に/はる/は/き/に/けり/ひととせ/を/こそ/と/や/いは/ん/ことし/と/や/いは/ん。★

0002 そで/ひち/て/むすび/し/みづ/の/こほれ/る/を/はる/たつ/けふ/の/かぜ/や/とく/らん。★

の、ように、手作業で「/」などのタグを付していく必要があった。古典語の場合、単語単位の認定や、統一した単位切り方針の徹底がいかに難しく、労力を要する作業であるかは、いわゆる総索引作りを経験した者であれば、誰もが知るところであろう。それに対して、この長尾・森プログラムでは、分析対象のテキストデータに求められるのは、“表記体系の統一されたデータであること”だけである。漢字仮名交じり文であれ、清濁表記であれ、表記方法が一定であれば結果を出す事が出来る。今回は和歌であることから掛詞なども配慮できるように漢字表記は避けて平仮名にひらき、清濁・仮名遣いを統一する方針をとった。その表記統一したプレーンテキストに、性別情報と歌番号、歌末記号をタグ付けた次のようなものが、今回の分析用に作成したデータである。

m,こきん0001 とし/の/うち/に/はる/は/き/に/けり/ひととせ/を/こそ/と/や/いは/む/ことし/と/や/いは/む/

- m,こきん0002 そでひちてむすびしみづのこほれるをはるたつけふのかぜや
とくらむ。／
- n,こきん0003 はるがすみたてるやいづこみよしののよしののやまにゆきは
ふりつつ／
- f,こきん0004 ゆきのうちにはるはきにけりうぐひすのこほれるなみだいま
やとくらむ／
- n,こきん0005 うめがえにきゐるうぐひすはるかけてなけどもいまだゆきは
ふりつつ／
- m,こきん0006 はるたてばはなとやみらむしらゆきのかかれるえだにうぐひ
すのなく／
- m@,こきん0007 ころざしふかくそめてしをりければぎえあへぬゆきのは
なとみゆらむ／

入力本文は岩波書店・日本古典文学大系『古今和歌集』（梅沢本、1111首）で、これを清濁を付した平仮名表記にあらため、行頭に作者名に応じて性別のタグを付した。性別タグは、男性歌人はm（maleの頭文字）、女性歌人はf（femaleの頭文字）、読人不知はn（neutralの頭文字）とし、また次の例のように、左注などで作者が示唆されている場合、男性はm@、女性はf@とし、今回はそれぞれの性に含めて統計した⁽¹⁵⁾。

【例】古今和歌集・7番歌

題しらず	読人不知
心ざしふかく染めてしおりければ消えあへぬ雪の花とみゆらん	
ある人の曰く、前太政大臣の歌也	

→ このような場合にはm@とする。

このデータを、m・f・nの性別情報に従って分類し、長尾・森プログラムで処理すると、どのような結果が得られるか、具体例をあげてみよう。

【男性歌人3グラム の文字列例】

74 ころ	33 ひと	24 るらむ	20 ながら
-------	-------	--------	--------

50 おもひ	33 とおも	24 こひし	20 ごとに
49 のやま	32 おもふ	23 ほとと	20 ころも
41 りける	30 はなの	23 ととぎ	20 おもへ
35 るかな	30 さくら	22 はるの	19 らばな
35 やまの	27 もみぢ	21 わかれ	19 むひと
35 のはな	27 なみだ	21 ひとに	19 のなか
34 あきの	26 なりけ	21 かりけ	19 にけり
33 りけり	25 なくに	20 ものを	19 にけり

例示したのはm（男性歌人）の全詠歌において、 $n=3$ 、すなわち3文字の文字列を網羅した結果の一部で、出現頻度の高いものから順に挙げたものである。各頭の数字—たとえば「74ころ」の「74」が、その文字列の出現頻度であり、男性歌では「ころ」が、3文字の言葉としては最多出現し、それは74回であることがわかる。 n グラム統計においては、2、1でも述べたように、テキストデータ中の文字列を単語であるかどうかにかかわらず指定した n の長さごとにすべて列挙し、頻度をはかるので、ここでも「とおも」「なりけ」のように単語ではない文字列まで抽出されているが、「おもひ」「ころ」「みやこ」「さくら」「もみぢ」「なみだ」のような名詞はもとより、「ものを」「ならば」など助詞・連語も含めて、すべてが網羅されてくる。ちなみに同様の統計を女性の3グラムでとり、抽出されてくる内容を頻度順に挙げると、

11 おもひ・10 わがみ・9 ころ・8 ひとの・7 ものを・6 ぬれば・5 わかれ
 5 のなか・5 のおと・5 にひと・5 なりけ・5 かなし・4 るもの・4 もなき・4 もあら・4 みやこ ……

となり、簡単に比べても、上記男性の3グラムの分布と異なって、女性歌では「我が身」が「ころ」を退けて2番目に多く用いられている語彙であることなどがわかる。

この n の長さの設定は、2、1で、長尾・森プログラムの利点として③「 n グラムの n の値を任意に設定できること」としたように、長くすることも、

短くすることも自由であり、様々な長さに設定を変えることにより、次のように、色々な角度から「表現」を取り出し、計量化することが出来るのである。

2. 3 計量化される様々な表現

では、古今集で実際に取り出される「表現」を、短いnの場合と長いnの場合の二つの面から見てみよう。

(A) 基礎語彙・歌語・枕詞・連語などの抽出－nを短く設定した場合－

【女性歌人2グラムの文字列例】

27 ひと・21 おも・20 もの・19 なり・18 わが・
 16 やま・15 はな・15 との・14 もひ・14 のな・
 14 ころ・13 のみ・13 なき・12 には・12 とは・
 12 しき・12 ここ

【男性歌人5グラムの文字列例】

23 ほととぎす	11 とおもへば	9 ぞありける
18 さくらばな	10 とのこころ	8 ならなくに
16 をみなへし	10 うめのはな	8 しらゆきの
12 はるがすみ	9 ひとのここ	7 ひさかたの

【読人不知5グラムの文字列例】

17 ほととぎす	8 はるがすみ	7 うめのはな
12 ひきのやま	8 さくらばな	6 よのなかは
12 しひきのや	8 うぐひすの	6 よのなかの
12 あしひきの	7 ぞありける	6 ものおもふ

まず、nが短い場合について見ると、1グラムでは、1音節の単語「き」

「め」なども含まれるものの、大半が文字の頻度となつてしまいあまり有効ではないが、(A)に見るように、2グラムでは「ひと」「もの」「わが」「はな」「ころ」等、基礎語的なことばが現れてくる。3グラムでは、前掲のように「こころ」「おもひ」「おもふ」「わがみ」「ひとの」「さくら」「もみぢ」「こひし」「ものを」「わかれ」などと、歌のことばとしての輪郭のあるものが一気に増加し、一句分に相当する5グラム、すなわち5文字になると「ほととぎす」「さくらばな」「をみなへし」「はるがすみ」「しらゆきの」「はなのいろ」「たつたがは」と、歌語は歌枕も含めてますます充実し、「ひさかたの」「あしひきの」「ちはやぶる」といった枕詞や、「ものおもふ」などの動詞、「ならなくに」「やはあらぬ」など特徴的な連語も網羅されてくる。

(B) 類句・類歌・影響関係の想定できる歌などの抽出—nを長く設定した場合—

更にnが、一つの句を超える文字列である8グラム以上になると

【男性歌人8グラムの文字列例】

4 かみなづきしぐれ	3 はなすすきほにい	3 あらじとおもへば
3 やまのさくらばな	3 ぬものにぞありけ	3 あしひきのやまの
3 ものにぞありける	3 なにこそありけれ	2 をみなへしおほか
3 むちはやぶるかみ	3 ぞあやまたれける	2 をおもふころかな

「かみなづきしぐれ」「をおもふころかな」のように類句と呼べるようなものや、「やまのさくらばな」「なにこそありけれ」「あらじとおもへば」など様々な言い回しが抽出されてくる。これらはみな複数回出現する訳だが、その内訳を見ていくと、歌風や、特定の表現の生まれてくる機微を知る手がかりとなるものも少なくない。

「あらじとおもへば」を例にとろう。「あらじとおもへば」は、古今集には、『伊勢物語』80段でも知られる、業平の「ぬれつつぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば」(133番)、をはじめ、男性に他2首(880番・貫之、978番・躬恒)、女性に、これもまた著名な伊勢の1首「三輪の山

いかにまち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば」(780番)、更に読人不知に1首(1032)の計5首があるのだが、古今以後の作例は僅かで、後撰集・金葉集三奏本・詞花集に各一首があるにすぎず、また万葉にも用例はない。初出は業平であり、過ぎゆく春を惜しむ思いを託した「春はいくかもあらじと思へば」の名句は、時のとどめがたい移ろいをすくい取った独特のことば続きとして、古今当代の著名歌人に好まれ、完結した、古今集らしい「ことば」と見なすことが出来るだろう。長いnでは、このように、歌風に還元可能な表現が相当数抽出されてくるのである。

では、古今集内で複数回出現する最も長いことば続きとはどのようなものであろうか⁽¹⁶⁾。

(c) 2度以上出現する最長文字列

【男性歌人=12グラム】

2 あかずしてわかるるなみだ	2 ながらのはしのながらへて
2 かとのみぞあやまたれける	2 みよしののやまのしらゆき
2 こしのしらやましらねども	2 をみなへしおほかるのべに
2 さみだれのそらもとどろに	

【女性歌人=18グラム】

2のおとにだにひとのしるべくわがこひめ

【読人不知=24グラム】

2あしひきのやましたみづのこがくれてたぎつこころを

上記のように、男性では12グラムで7組、女性では18グラム、読人不知では24グラムでそれぞれ1組を求めることが出来る。女性・読人不知の歌はそれぞれ、一首三十一文字の半分を超えて一致することになるが、この場合には、次のように異伝歌や、伝承歌的な歌句をもつ歌同志が選ばれてくる。

山科の音羽の山のおとにだに人の知るべくわが恋ひめかも

(恋三・664・読人不知)

左注「この歌、ある人、近江采女となむ申す」によって女性歌に入れたもの)

山科の音羽の滝のおとにだに人の知るべくわが恋ひめやも

(1109・墨滅歌、「返し、采女の奉れる」)

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

(恋一・491・読人不知)

……あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をたれにかも相語らはむ

(雑躰歌・1001・読人不知、長歌の一節)

歌詞の半分以上を超えた一致では、類歌が抽出されるといってよい。

それに対して、男性の12グラム7組は、次に挙げるように、単純な類歌としては扱えないものが多い。

1. あかずして別る涙たきにそふ水やまさると下は見ゆらむ

(離別・396・兼芸)

……富士の嶺の 燃ゆるおもひもあかずして別る涙藤衣をれるころも八ちぐさの

(雑体・1002・貫之)

2. み吉野の山辺にさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける

(春上・60・友則)

花見つつ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

(秋下・274・友則)

3. きみが行く越の白山しらねども雪のまにまに跡はたづねむ

(離別・391・兼輔)

思やる越の白山しらねども一夜も夢にこえぬ夜ぞなき

(雑下・980・貫之)

4. 五月雨の空もとどろに郭公なにを憂しとか夜ただなくらん

(夏・160・貫之)

……春霞 思ひみだれて五月雨の空もとどろに小夜ふけて山郭公鳴くごと
(雑体・1002・貫之)

5. 逢ふことを長柄の橋のながらへて恋ひわたるまに年ぞへにける
(恋五・826・是則)

……かくしつつ長柄の橋のながらへて難波の浦に立つなみのなみの皷
にや…… (雑体・1003・忠岑)

6. み吉野の山の白雪つもるらし古里さむく成りまさるなり
(冬・325・是則)

み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人のをとづれもせぬ
(冬・327・忠岑)

7. 女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をやたちなん
(秋上・229・美材)

花にあかでなに帰るらむ女郎花おほかる野辺に寝なましものを
(秋上・238・貞文)

1～7の句はすべて万葉に無く、ここにあげた古今時代歌人が独自に展開したもので、しかも友則・貫之・是則・忠岑・兼輔・貞文など、活動時期の重なる限られた歌人、交遊の認められる歌人などに集中している。2・4のように同一歌人が同一の類句で詠じているのは、歌人の歌風を考察する一助となるし、3・5・6・7は、歌人どうしの影響関係を想定させる。ちなみに、男性歌人歌では9～12グラムの中に、同様に2句分にわたる一致をもつ歌が22組44首も認められた。歌人は上記のメンバーと重なり、特に貫之が多いなど、撰者時代における「古今の表現」の形成過程や相互影響の実態を知る糸口として重要な事実であろう。

以上から、nの設定によって、いかに様々な「表現」が抽出され計量化されるか、具体化出来たと思われる。それは、歌語・語彙・枕詞・連語、類句・類歌から歌人同志の影響関係に到るまで、極めて多岐に渡るのであって、2.1でのべた、“nグラム統計は、そのテキスト全体についての網羅的な情報を含むものとなる”とは、具体的にはこのような事を意味しているのである。それによって得られる結果は、従来の品詞ごとの語彙分析で得られるも

のとは、全く質を異にしているといってよい。不要な文字列の混在というデメリットはあるが、形態素解析の煩雑な作業が必要なく、かつ様々な文字列を抽出するという点にかけては全く遺漏がなく、しかもそれら文字列の頻度数が同時に計量される、という種々のメリットはデメリットを補ってあまりあろう。研究者はその目的に応じて様々な示唆を得、考察を展開することが可能となるのである。実際、男性12グラム7組で確認したような詠歌の実態は、特徴ある歌人同士の特徴ある歌句の一致であるにもかかわらず、『古今和歌集』の従来注釈で指摘はなされていない。研究者の通常の認識の枠を超えた、新しい問題の提示が、これらから得られる可能性もあるに違いない。

では、上記の手続きで、文字列単位で、男・女・読人不知、それぞれの表現と出現頻度を得たとして、次に必要なのは、それぞれの独自表現をより分ける作業であろう。次項では、そのためのツールについて述べる。

2.4 nグラム集合演算法－nグラム統計処理とcommを組み合わせる－

男性歌だけに現れる文字列、女性歌だけに現れる文字列、あるいはまた男女の歌に共通して現れる文字列を、すべてより分けるには、たとえば、全男性歌文字列から全女性歌文字列を引き算する、また逆に全女性歌文字列から全男性歌文字列を引き算するというようなことが出来れば良いわけであるが、そのための簡便で効果の高い方法としてここで用いることにしたのが、nグラム統計処理結果をcommで相互比較していく方法である。commは多くのUNIX（ワークステーションのオペレーティングシステム）に搭載されている標準ツールで、整列された2つのテキストファイルを比較して、その共通文字列、独自文字列を抽出することができる。やや煩雑になるが、その仕組みを、まず簡単に示しておく。

例えば、次のような内容の、XとYという二つのテキストファイルがあるとする。それぞれには、例えば「あ」で始まる7つずつの単語が五十音順（正確には文字コード順）に整列した状態で入っている状態を考える。

(Xの内容)	(Yの内容)
あか	あさ
あさ	あしひき
あした	あす
あす	あそび
あせ	あたま
あたま	あたら
あみ	あり

commを用いることで、この二つのファイルを比較して、次のような三つのグループの単語群を抽出することができる。

(Xにしかない単語)	(Yにしかない単語)	(XとYに共通する単語)
あか	あしひき	あさ
あした	あそび	あす
あせ	あたら	あたま
あみ	あり	

それぞれが数万の数にのぼる単語や文字列群であっても、また、対象が2つだけでなく、3つ以上のテキストファイルになる場合でも、このツールによるならば、容易に相互に比較を繰り返し、テキストファイル同志の共通部分と独自部分を求めることが出来るのである。

古今集の歌は作者別に見ると、男m・女f・読人不知nの3つの位相に分かれる訳であるから、この方法で男・女・読人不知の三者の文字列の相互比較を繰り返すと、各々の独自表現・共通表現として、下図A～Gに該当するそれぞれの文字列データを求めることが出来る。

A = 男性独自文字列

B = 男性・女性共通文字列

C = 男性・女性・読人不知三項

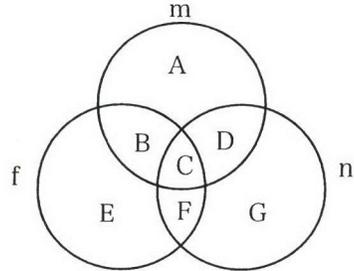
の共通文字列

D=男性・読人不知共通文字列

E=女性独自文字列

F=女性・読人不知共通文字列

G=読人不知独自文字列



A～Gの各部分だけでなく、たとえばA・Dを組み合わせると男性歌の表現で読人不知歌とは重複するが、女性歌に出現しないものをすべて抽出する、というように、パーツを組み合わせるならば、更に色々な側面が、自在に把握出来、分析可能となる。この方法で、男性・女性・読人不知3つの位相のそれぞれの独自の表現、あるいは相互に共通する表現を、語彙を超えた文字列の単位で余すところ無く抽出する事が出来る訳である。

以上述べてきた、nグラム統計処理とcommを組み合わせ、2つ以上のテキストデータを比較して、文字列レベルで独自表現・共通表現を求める方法を、以下nグラム集合演算法と称することとする。

次に、実際にこのnグラム集合演算法によって得た表現から、性差を反映した「ことば」の型の考察に移りたい。

3 古今和歌集の「ことば」の型と性差

3. 1 性差を反映した「ことば」—今回の考察範囲—

さて、ここからは、抽出した個々の「ことば」に即した考察に入るが、nグラム集合演算法によって得られる結果は、量的にも多く、かつ内容も多角の問題にわたるため、一括して扱うことは困難である。そこで、まず本稿では、次の範囲で、計量結果の報告と考察を行うこととする⁽¹⁷⁾。

- ① 文字列の範囲はn=3～7グラムとする。
- ② 男性歌の特有の「ことば」を抽出する。
- ③ 出現頻度の高いもの—複数回用例のあるもの—に注目する。

- ④ 意味の成す文字列だけに注目する。したがって「べくわがこひ」「ましなのと」などの文字列は除外した。

以上のように定めた範囲、すなわち男性に特有な「ことば」で、 $n=3\sim 7$ グラム、出現頻度は2以上、に該当する意味を成す文字列として、今回658例を得た。658例の全体については、本稿末に「古今和歌集男性特有表現一覧」として、用例数の上位のものから順に掲出する。計量分析によって得た一つの結果であり、今後の考察の基礎資料として提示しておく。

さて、その中から、まずここに独自用例数の高いものから順に50語を例示してみよう。数字は男性歌人における用例数である⁽¹⁸⁾。

をみなへし16	ありけれ7
こころを14	おもほえ7
しらゆき13	かみなづき7
みだれ13	くもあるか7
もみぢば13	しなれば7
ながれ12	ぞちりける7
まさり12	たつたがは7
むかし12	ちはやぶる7
よしの12	みやま7
うめのはな11	あかず6
こひしき11	あるかな6
あきのの10	いはむ6
かりける10	いろまさり6
ならなくに10	おもへども6
しらくも9	からに6
とおもひ9	こひしかり6
もあるか9	こひしかる6
かりけり8	しらたま6
しらつゆ8	しらやま6

たれか8	たなばた6
にしき8	ちとせ6
あしひきの7	つれなき6
あしひきのやま7	なければ6
あづさゆみ7	なみだがは6
あまのかは7	にけるかな6

名詞もあれば活用語もある。「かりける」「ならなくに」「しなければ」のような特徴的な言い回しが高い数値で得られる事も注目される。名詞にも、「をみなへし」「もみぢば」「うめのはな」のような植物もあれば、「しらゆき」「しらくも」「しらたま」のように色彩の共通という点で捉える事も可能なもの、「あしひきの」のような枕詞、また同じ枕詞でも「あづさゆみ」のように物象的働きをする語もある。また、「こひしき」(11例)、「こひしかり」「こひしかる」(各6例)のように、同じ語彙として纏めるならば、相当の語彙数にのぼるものもある。これらの用例は、そのことばの性格や、和歌での働きを勘案して、いくつかの基準を立てて、仕訳することが可能と思われるので658例のうち、更に、出現頻度5以上のものの内容を検討し、分類を試みた。次にその分類案をもとに考察を進めよう。

3. 2 『古今和歌集』の男性の「ことば」を腑分けする

男性に独自に出現するもので用例数が5以上のものを、次のような項目に分類した。景物や物象表現(名詞を中心とする)、枕詞、動詞などといった区分だけでなく、試案として、時間表現、感覚表現、接続表現・文末表現、特徴的連語の項目を立ててみた。特に特徴的連語を立てたのは、例えば「恋ふ」を核とする語の内容に見るように、動詞「恋ふ」、形容詞「恋し」、複合語「恋ひつつ」「恋わたる」、類句「恋もするかな」のように、nグラム統計ならばこそ得られた、品詞等を超えて、ある概念で纏めうることばを、一括して扱うことが有効と考えたためである。名詞「通ひ路」「たむけ山」「佐び人」なども、それぞれ「通ふ」「手向く」「佐ぶ」の項目に挙がっているので留意

願いたい。

【景物・物象】

植物：をみなへし16・もみぢば13・うめのはな11・あきのの10・わかな5・

わすれぐさ5・ふじばかま4

虫：うつせみ5

天象：あまのかは7・たなばた6・くもみ5・ふくかぜ5

色彩：しらゆき13・しらくも9・にしき8・しらたま6・しらつゆ8

身装具：あづさゆみ7・かたみ5・たまのを5

住居：まがき5

地名：よしの12・たつたがは7・しらやま6・おとはやま5

【動詞】 なびく5・わたらむ5

【枕詞】 あしひきの7・ちはやぶる7・あらたまの5

【時間表現】 むかし12・ちとせ6・よろづよ5・きのふ5／かみなづき7

【感覚表現】 つれなき6・かなしかり2・かなしき2・かなしけれ2・さ
むく2・さむみ4・よをさむみ3・にほひ5

【接続・文末表現】 かりける10・かりけり8・かりけれ3・かるべき3・
ならなくに9・ありけれ7・あるかな6・しなれば7・ぞちりけ
る7・からに6・にけるかな6・にこそありけれ5・まにまに5・

【特徴的連語】

1. 「飽かず」を核とする語：あかず6・あかずして2・あかで2・あかぬ4
2. 「逢ふ」を核とする語：あはで3・あはまし2・あはむ3・あふこと5・あふさかのせき2・あふよ3・あふよしもがな2
3. 「～に出づ」を核とする語：いろにいで5・いろにはいでじ2（「いろにいづ」は古今全例で10）・ほにいでて3
4. 「老い」を核とする語：おいにけるかな2・おいらく2
5. 「思ふ」を核とする語：おもはず2・おもはぬとき2・おもはまし2・おもはむひと2・おもひおき2・おもひきや2・おもひきゆ2・おもひけむ2・おもひける2・おもひおき2・おもひそめ2・おもひぬる

- 2・おもふころ5・おもふころかな2・おもふひと3・おもへども
6・おもほえ7・おもほゆ4・ものをおもふ3・ひとをおもひ2・ひ
とをおもふ2
6. 「通ふ」を核とする語：かよひぢ5・かよひて2・かよふ3・かよへる2
7. 「恋ふ」を核とする語：こひしかり6・こひしかりける2・こひしかる6・
こひしかるべき2・こひしきものを3・こひしと2・こひつつ2・こひは4・
こひはし2(恋死)・こひむと2・こひも4・こひもするかな3・こひやわ
たらむ3・こひわたる3・こふる4
8. 「知る」を核とする語：しらねど3・しらまし2・しられず2・しられぬ
3・しりぬる2・しるひと5・しるべく2・しるらむ2
9. 「立つ」を核とする語：たちいでて2・たちかくす2・たちかへり3・た
ちなむ2・たちわかれ3
10. 「手向く」を核とする語：たむく3・たむけ2・たむけやま1
11. 「散る」を核とする語：ちらす3・ちらず2・ちらばちらなむ2・ちり
なむのち2・ちりぬる3・ちるはなごと2・
12. 「なく(鳴く・泣く)」を核とする語：なきこそわたれ3・なきわたる2・
なくこゑ3・なくしかの2・なくなみだ2・なくなる3・なくね3・な
みだがは6
13. 「まさる」を核とする語：いろまさり6・まさらじ2・まさり12、ま
さるな2、まされる3
14. 「まどふ」を核とする語：まどひ4・まどふ2・
15. 「見る」を核とする語：みえし3・みえず3・みえな4・みえなむ2・みえ
ぬ4・みえね4・みえねど2・みえわたるかな2・(みむひと・みもせぬ)・
みるまで・みるらむ、とみゆらむ・とみるまで・ともみえず
16. 「乱る」を核とする語：みだる2・みだれ13
17. 「山」を核とする語：あしひきのやま7・みやま7・はるのやま6・は
るのやまべ5・やまたかみ5・やまのさくら5
18. 「侘ぶ」を核とする語：わびしかり2・わびしき3・わびしけれ2・わびし
ら2・わびしらに2・わびて2・わびびと4・わぶとこたへよ2

これらの語句・表現は、古今集において、女性には全く用例のない、男性側にシフトした用語ということになる。しかも、重ねて述べておくと、上記のようにn グラム集合演算法で抽出されてくるこれらの「ことば」は、活用語尾まで含めた動詞・形容詞、それが打ち消しの助動詞や意志の助動詞を伴う場合などの連語の語形そのもの（こひしかるべき・こひやわたらむ・しられず・みえず・みえね、など）、複合語として歌表現を成すもの（はるのやまべ・わぶとこたへよ、など）を、すべて含むのであり、こうした多面的情報は、形態素解析など単語に分割した分析では決して得られないのである。この分析法ならではのこそ得られる動詞や特徴的連語などを見ると、当代男性の思考・行動の型見本のような表現が抽出されていることに改めて驚かされる。「知る」や「見る」など、対象に積極的に働きかけてこれを知覚しようとすることは、多く、男性側に属する意志であり、また彼らは、「人を思い」、「ものを思ひ」、様々に思惟する主体でもある。「通ふ」「立つ」「わたらむ」など、対象に向かって行動していくのも、“男性”のあり方なのであり、「恋」をし、その思いをまず表す役割存在であることが、「穂に出づ」「色に出づ」などの歌ことばの背後にあった。女の「つれなき」ことを嘆き、恋の思いに「まどひ」、「なきわたる」自己（泣き続ける自分）をアピールする。そうした彼らにとって「なく鹿」や、鳥の「なく音」は自己を投影した景物に他ならない。中にはこの特異語をトリプルでよみ込んだ次のような歌もある。

つれなきを今は恋ひじと思へども心よはくも落つる涙か

（古今・恋五・809・菅野忠臣、寛平御時后宮歌合の歌）

専門歌人ではない官人の詠作ということもあろうが、「つれなき」「恋ひじ」「涙」を盛り込んだ、まるで男の恋歌らしい言葉を、パッチワークしたような歌と言える。

また一方で、男は「老い」を嘆き、身の不遇を「侘ぶ」る。これが古今集の「ことば」に様式化された“男性”という存在であったということになる。では、これらの「ことば」の乏しい“女性”とは、その逆ということになるのだろうか。表現に集約された、男性と女性の相違を端的にうかがわせ

るものとして、「恋ふ」と「飽く」を取り上げ、次に歌の内容とあわせて、詳しく追ってみよう。

3. 3 男性-恋する主体-

「恋ふ」を核とする語に掲出した、こひしかり・こひしきものを・こひもするかな・こひやわたらむ・こふる、などの語句は、すべて、古今の女性には用例がない訳であるが、「恋」関係の語彙全体では、男女の比率はどうなっているのだろうか。語彙索引で検証してみよう。片桐洋一監修・ひめまつの会編『八代集総索引 和歌自立語篇』⁽¹⁹⁾によって「恋」のつく語句と、古今集での用例数と詠み手を調べると次のようになる。

こひ (恋) 全10例、女性歌0

こひこふ (恋ひ恋ふ) 全2例、女性歌0

こひし (恋し) 全45例、女性歌2 (小町2首)

こひしぬ (恋死ぬ) 全4例、女性1

(読人不知だが、詞書で橘清樹の交際する女とされる)

こひす (恋す) 全3例、女性0

こひはす (恋はす) 全6例、女0

こひわすれぐさ (恋忘れ草) 全1例 (貫之)、女0

こひわぶ (恋侘ぶ) 全1例 (敏行)、女0

こひわたる (恋わたる) 全6例、女0

こひやわたる (恋やわたる) 全4例、女0

こふ (恋ふ) 全32 女1 (近江采女)

「恋」の付く語句を網羅すると、古今集では、上記のように全114例となる。うち、女性歌は4首にすぎない。わずか3%である。しかもその中、2首は、恋二巻頭の小野小町の歌

うたたねに恋しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき (553)

いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る (554)

であり、これは、後藤祥子が「忍ぶる恋」という主題を詠む点で女の恋歌では例外的と指摘する、まさにその歌となっている。もう1首は近江采女が天皇に応え奉った歌、残る1首の、橘清樹への女の歌は、恋三の巻において、女の側から男に贈った少数例のうちの1首と、むしろ特殊な歌が多いのである。男性の作例が

ほととぎす初こゑ聞けばあぢきなく主さだまらぬ恋せらるはた

(夏・143・素性)

山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

(恋一・479・貫之)

河の瀬になびく玉藻のみがくれて人に知られぬ恋もするかな

(恋二・565・友則)

大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

(恋四・743・酒井人真)

逢ふことを長柄の橋のながらへて恋ひわたるまに年ぞ経にける

(恋五・826・是則)

と、実に自由に、各巻に渡って恋することの歌境を展開していくのに比べ、“恋する”女たちのなんと限定されることであろうか。

後撰集でも、この傾向に大きな変化はなく、同様の手続きで得た「恋」の付く語句100例のうち、女は7例にとどまっている。この集では読人不知の割合が高く、またその中には女性作者の想定されるものも古今集より多くなっているが、それにしても男性歌人名の記載された歌は46首と、女性を圧倒しており、当代の男性によっては

あさぢふの小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき

(後撰・恋一・577・源等)

くれはとり綾に恋しくありしかばふたむら山も越えずなりにき

(恋三・712・清原諸実)

と、続々と恋する事を歌った名歌が生産されていく。古今にはじまる王朝和歌の「ことば」の型では、“恋する”のは、まず男性という定型が基本認識としてあったことがうかがえよう。

しかし、そうした定型は、万葉集では必ずしも認められない。万葉では、次のように、文字通り“恋する”女の歌は少なくない。

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く

(巻四・488・額田王)

しきたへの枕ゆるるる涙にそ浮き寝をしける恋の繁きに

(巻四・507・駿河采女)

我のみそ君には恋ふる我が背子が恋ふといふことは言のなぐさそ

(巻四・656・大伴坂上郎女)

をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも

(巻四・675・中臣女郎)

いなと言はば強ひめや我が背菅の根の思ひ乱れて恋ひつつもあらむ

(巻四・679・中臣女郎)

額田王や坂上郎女や中臣女郎のように、恋する自己を自由に歌いあげる女性歌は古今では影をひそめてしまうのである。恋する主体、その役割を男性に特化することは、古今集にはじまると言ってもよい。男性にとって普通に用いられる「ことば」が、女性にはそうであり得ないこと、このような「ことば」の型における男女の棲み分けの実態は、次に見る「飽かずを核とする語」では、いっそう顕著となる。

3. 4 「飽かず」思う

「飽かずを核とする語」には、あかず6・あかずして2・あかで2・あかぬ4と計14例があるが、男性が“飽きない”と詠む内容は、多岐にわたる。

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

(春上・37・素性)

鶴亀もちとせののちは知らなくにあかぬ心にまかせ果ててむ

(賀・355・在原滋春)

逢坂の関しまさしきものならばあかずわかるる君をとどめよ

(離別・374・難波万雄)

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

(離別・404・貫之)

春霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

(恋四・684・友則)

恋人(女性)を飽きなく思うという歌だけでなく、季節の景物をいとおしみ、主家の齢がいつまでも続かんことを願い、旅立つ人との別れを惜しむ。対象への、尽きることない愛着の念をあらわすこのことば、それが「あかず」の意味である訳だが、しかし、この言葉は男性に限られた用語となっている。三代集で53の用例があるが、その中で、女性の歌は、わずか2首を数えるのみにすぎない。うち1首を挙げてみよう。

ありしだに憂かりしものをあかずとていつこに添ふるつらさなるらん

(後撰・恋五・952・中務、詞書「左大臣につかはしける」)

中務が藤原実頼に贈った歌であり、歌意は「今までもつらいことでしたのに、それでもまだあなたは満足いかず、これ以上、つれない仕打ちをどこに加えるとおしゃるのでしょうか」となり、実際は「あかず」の直接の主語は、相手の男性と解釈される。対象を飽きなく思う主体に立つ「ことば」の型を、女は通常では取り得ない。こうした「飽かず」思うことばの男性への偏向ぶりの対局にある言葉が、n グラム集合演算法で得た女性特有表現に見いだせる。次の「あかれやはせぬ」である。

桜花春くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ (古今・春上・61・伊勢)

「飽かれやはせぬ」－「十分に満足されようか」という受け身型をとる表現がそれであり、これには反対に男性の用例がない。出現頻度1の語句だが、女性の「ことば」の型を知る上で、有効な事例である。伊勢の当該歌は、恋歌ではなく春の歌で、桜を擬人化した季節詠だが、彼女は「(自分が) 飽くことがあろうか」ではなく、「花が」「人の心に」、飽かれることがあろうか、と受け身型の表現をあえてとって行くのである。人であれ、花・月などの景物であれ、対象を飽きなくいとおしむという発想とことばは、男性の専らにする領域としてあったことになろう。社会・生活において、対象に働きかける能動性を属性とする男性と、それを持たない(ないしは許されない)女性という、両者の社会的役割の別が「ことば」の型を規定してたこと、しかもその規定は、当時の言語意識にかなり厳密に浸透していたことを、これらの事例は示していよう。

ところで、こうした男性の領域に属することばを、女性が例外的に用いる場合がある。女性が男性の立場で歌を詠む例としては、後藤祥子によって⁽²⁰⁾、屏風歌・歌合歌や百首歌という題詠の場が指摘されているが、ここでもう一つ注目したいケースがある。女性同士の贈答である。「あかず」をよんだ女性歌で、古今集の残る一例を挙げてみよう。

女ともだちと物語して、別れて後に、遣はしける

あかざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する (雑下・992・陸奥)

女友達と尽きない会話に花を咲かせて別れた、その名残惜しさを、恋歌仕立てにしたものである。実は、この女房同士の贈答という事例が、女性が男性特有表現を用いるケースを見ていくと、目立って認められるのである。前項で述べた「恋しい・恋する」でも、後撰集の女性7例の中の1例とは、次の贈答であった。

一条がもとに「いとなん恋しき」と言ひにやりたれば、鬼の形を書きてや

るとて

恋しくは影をだに見てなくさめよわがうちとけてしのぶ顔なり 一条

返し

影見ればいとど心ぞまどはるる近からぬ気のうときなりけり 伊勢

(後撰・恋五、909・910の贈答)

伊勢と一条という女房どうしの贈答だが、この擬似恋愛風のやりとりにおいて、伊勢は、「ことば」の型において、徹底して男役に立っている。一条に送った手紙文にあったらしい「いとなん恋しき」の「恋しき」もそうであれば、「いとど心ぞまどはるる」の「惑ふ」も、先に「まどふ」を核とする語として一括掲出したように、古今での男性特有表現であり、かつ後撰集でも女性の用例は伊勢にしかない。古今・陸奥の「あかざりし」の歌も同様だが、親密で特別な友情のあらわす時、彼女たちは男性に対して発することのない「ことば」を、女どうしでは取り交わす。それはまるで暗黙の了解のようでもある。そして、そのような贈答において、性差を反映した「ことば」の型が、みごとに活用されているのである。当然これは、男性どうしの贈答にも言えることで、従来から言及されることの多い、惟喬親王と在原業平、藤原兼輔と紀貫之など、主従の連帯や男性の友情の表現についても、逆に女性の「ことば」の型の反映があるかどうか、検証することも出来るだろう。なお、女性が男性領域の「ことば」をよむ事例には、他に葬送・哀傷歌が多いなどいくつかの限定があること、また、そうした「ことば」を用いる女性として、伊勢・馬内侍・和泉式部など特定の女流歌人が浮上することなど、新たに論ずべき点が多いので、これについては、別稿にまとめたい。

さて、「飽かず」の表現の問題には、もう一つ、見落とせない点がある。そうした男性的観点で把握される対象が、恋人・友人という“人間”だけでなく、広く四季の景物に及んでいることである。「あかず」が男性的観点を属性とする語であるからこそ、それによって捉えられた景物、たとえば素性が「梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」と詠む時の「梅の花」は、「手折られ、愛玩される女」というような、限りなく女性イメージの付与されたものとなってくるのである。また、「あかれやはせぬ」と、伊勢が桜花を詠むとき、桜花

は飽かれるかもしれない存在＝女性性を湛えるものとして立ち現れることになろう。それは伊勢自身の「女性」とも重なって、いつそう複雑に自然と人事の一体化が果たされることになる。古今的自然の本質として指摘されてきた、この、景物や風景の人事性についても、性差を反映した「ことば」の型という観点を構える時、新たな側面から、有効な分析が可能となるのではないだろうか。

素性のよむ「梅の花」も、3. 2の一覧【景物・物象】に示したように、男性特有の、用例数の多い語句として抽出される語句であった。景物や物象表現に、性差を反映した「ことば」はどうかかわるのか。すでに紙幅も尽きているが、最後にその点について、簡単な見通しを述べておく。

3. 5 景物・物象の問題—喩の女性性と男性性—

まず【景物・物象】項で、高い数値で挙がってくる語句に、一つ共通する傾向に、人事性を付与された景物が多いという事がある。特に、「植物」項目では、女郎花16・梅の花11、また用例数は4だが藤袴など、男性の視点で捉えた女性のイメージの付与された景物が大きな割合をしめている。そして、女郎花も梅の花も藤袴も、すべて万葉にも既出の景物ではあるが、特に古今集において、女郎花はその名称の連想から、梅の花は芳香への着目から、藤袴は芳香と「袴」という語の連想から、色濃い人事性を持ってよまれるようになり、以後の類型となったことが、個別に指摘されている点が注目されよう。よく知られた事柄ではあるが、女郎花・藤袴についても、確認のために例歌を挙げておく。

女郎花

誰が秋にあらぬものゆへ女郎花なぞ色にいでてまだきうつろふ

(秋上・232・貫之)

花にあかでなに帰るらむ女郎花おほかる野辺に寝なましものを

(秋上・238・貞文)

藤袴

宿りせし人のかたみか藤袴わすれがたき香にほひつつ

(秋上・240・貫之)

ぬし知らぬ香こそほへれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも

(秋上・241・素性)

万葉の女郎花は、「高円の宮の裾廻の野づかさに今さけるらむをみなへしはも」(巻二十・4316・大伴家持)など秋の景物として詠んだものが大半で、唯一女性を比喻したかと思われる「我が里に今咲く花のをみなへし堪へぬ心になほ恋ひにけり」(巻十・2279番・作者未詳)にも、古今・女郎花の、例歌のような多情で誘惑的な女性のイメージは、認められない。まして藤袴は、万葉では、秋の七草の歌「萩の花尾花葛花などしこの花をみなへしまた藤袴あさがほの花」(巻八・1538番・山上憶良)の用例しかないのに対して、古今では、名称の袴を衣服としての袴と、その花の芳香を人の移り香と関連づけて詠んでおり、美しい女性の脱ぎ置いた藤袴にほのかに恋情をかき立てられるという、官能性を内包したものとなっている。これらでの人事性とは、換言すれば、芳香に心惹かれ、姿かたちを鑑賞し楽しむという、男性からみた女性性の、景物への投影に他ならない。従来の研究は、これらを、擬人・比喻というレトリックの問題として扱ってきたのだが、実はそれらの大半が、男性の領域に属することばで、いわば男性の捉えた女性性を属性とすることを、あらためて問題提起しておきたい。ちなみに、古今集、秋上後半部では、「女郎花」が13首の歌群を形成するが、この13首は貫之・躬恒・忠岑・遍昭・敏行・定方ら、達者な男性歌人達の詠歌ばかりが一堂に会して圧巻である⁽²¹⁾。そこでは、遍昭の「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな」(226番)にはじまり、「女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつを誰によすらむ」(230番・時平)と浮気な風情を問われ、「一人のみながむるよりは女郎花わが住む宿に植えて見ましを」(236番・忠岑)「女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿に一人たてれば」(237番・兼覧王)と、様々に男性の視線を受け、そして「秋の野に宿りはすべしをみなへし名をむつましみ旅ならなくに」(228番・敏行)「花にあかでなへに帰るらむ女郎花おほかる

野辺に寝なましものを」((238番・素性)と一夜の宿りを希求される、いわば“女性”の代替としてある。この喩、配列、そして配列のうちに生起する風景を成り立たせているのは、あくまで男性の主観に立った女性性、その景物への付与であった。そして、この喩は、詠み手もまた男性主導で、後代に到るまで、女郎花にせよ、藤袴にせよ、女性は題詠の場以外でこれらを詠むことはほとんどいのであった⁽²²⁾。

一方では、検討の範囲を広げて行くと、男性が男性を比喻した景物・物象語も見いだされてくる。4例の「きりぎりす」や2例の「夏虫」などがそれである。「きりぎりす」は

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる

(秋上・197・藤原忠房)

もろともになきととどめよきりぎりす秋の別れは惜しくやはあらぬ

(離別・385・藤原兼茂)

秋思や離別に、物思い、泣く我(男性)が仮託される物象であり、また、「夏虫」は、

夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり(恋二・600・躬恒)

など、恋に破滅する自己(男性)の比喻としてある。次の『能因歌枕』の一文は、この言語感覚が平安後期まで浸透していたことを、如実に窺わせよう。

夏虫(ナツムシ)とは 女によりて身をいたづらになす物にたとふ

(『能因歌枕』)

ここでは歌語「夏虫」を、「女によりて身をいたづらになす」ことのたとえ、すなわち男が女によって身を破滅させる意、という性別を限定した認識を示している。能因自身、夏虫を詠んだ歌には「夏虫はうらやましくや思ふらんおのが思ひにもえぬ虫を」(能因法師集・164)が一首あり、彼は夏虫を

飛蛾と理解していたことになるが、いわば「飛んで火に入る夏の虫」は、平安時代の理解としては、女ではあり得ず、男の恋の姿、それも男が喩える男の恋の姿に限定されるのであった。これらの語もまた、平安期全体を通じて、女性の作例が極めて乏しい。八代集に「きりぎりす」を詠んだ女性の歌は無く、「夏虫」は、「夏虫のしるしる迷ふおもひをばこりぬかなしとたれかみざらん」(後撰・968) - あなたは夏虫が、知っていながら火のそばを飛び回るようなもの - と、相手の男性を「夏虫」に喩えて言い放った伊勢の歌と、和泉式部の百首歌での一首があるのみである(後拾遺・820)⁽²³⁾。伊勢や和泉式部は多作の歌人だが、彼女たちの家集においても、この2首以外の用例はない。

古今集で成立した、喩という「ことば」の型が、よみ手の性を後代まで限定していくほど強固に、男性性・女性性を一規範として内在させていることは、従来の研究では全く顧慮されてこなかった。上記の例に顕著であるように、男性性・女性性の型分けは、男性の視点でなされたものが大半だが、女性特有の用語には、女性が自らを比喻し、あるいは男性を比喻したものも散見する。出現頻度2に過ぎないことば「夏虫」にも、上記のように有意な裏付けが得られるのであり、今回得た男女の差のデータは出現頻度の低いものに到るまで有意性が高いことが予測される。ここではその導入部を見たに過ぎないが、網羅抽出された「ことば」を、総合的に検証する時、喩の成り立ちや、更には喩の背後にある、古今集の「ことば」が何を男性性の属性とし、何を女性性の属性としたのか、その認知の枠組みに迫ることが出来ると考える。

4 結語

以上の検証を通じて、古今集の「ことば」の型には、男女の領域の別があったことをあきらかにし、平安時代において、社会生活のあり方がことばの男女差に反映していく様子や、男性にとっての「恋」が、どのような型で認識されていたか、また男性が、女性的なるもの、あるいは男性的なるものをどのように文学のことばの型に定着させていったか、などを中心に、その実態

の一端を見た。それは、広く日本文化において、女性らしさ・男性らしさなどという認識や型、またその認識をあらわすことばの形成と展開に、古今集をはじめとする王朝和歌が大きな役割を果たしたことを予想させる。男女差のことばへの反映や、山河・草木を男性・女性として捉える素朴な自然理解は、発生的には古くからあるにしても、勅撰和歌集の「ことば」において、動作性・感情性のことばや、自然界の現象・景物などの全般にわたって、事細かに男性性・女性性を型分け、属性を規定し付与していく、その徹底がなされた意味において、またそれが以後の表現にとつての規範となった点において、古今的表現とは、性差を反映した「ことばの制度」を自覚的に内在させるようにしたものであったと捉えなおす事も出来るのではないだろうか。和歌の「ことば」の型におけるジェンダーの確立を、そこに認めることも可能だろう。いったい、生物学的性としてのセックスとは別に、社会的・文化的役割としての性差＝ジェンダーが、古代和歌に萌すのはいつからなのだろうか。万葉論において、この興味深い問題を扱ったすぐれた指摘が、佐佐木幸綱にある⁽²⁴⁾。佐佐木は、東歌を含む初期万葉の贈答歌は男女対等で、ジェンダー的な意味での性差は認められないとし、それが現れはじめるのは、「万葉集第三期、大伴坂上郎女あたりではないか。」との見解を示している。佐佐木は「〈立場〉でうたう恋歌の出現」と「恋する〈われ〉の内部に照明を当てた歌の台頭」をそこに看取するのだが、では表現はどうだったかというところ、こうしたジェンダーを意識した主体の登場した時代にあっても、依然として女性の恋歌の表現は古今集に比べて自由なあり方を保っていたことが阿蘇瑞枝によって検証されている⁽²⁵⁾。そうであるならば、万葉第三期に、文芸世界でのジェンダーが意識化されて以降、その認識がやがて「ことば」・表現のこまかなレベルまでに及ぶ機序となり、性差を反映した「ことば」の型分けが一通り完了するまでの過程が、まさに古今集成立までの間に果たされたことになる。それは、どのように進化したのだろうか。今回触れることの出来なかった読人不知歌の位相を検討して行くことで、その過程にも、ある程度見通しが立てられると思われる。今後は、今回抽出した「ことば」をもとに、男性的な文体、景物とジェンダー、女性歌人にとつての男性の「ことば」の型の問題、物語和歌や屏風歌など虚構世界の歌の性差意識の問題などを漸

次扱って行く予定だが、あわせて、古今集以外にも対象を拡大し、また万葉も加えて比較していくことで、古代和歌の新たな、そして様々な実態が見えてくる可能性があると考ええる。

それにしても、論述を通して特に実感したのが、平安時代のことばにあらわれた男女差を現代の語感で捉えるのがいかに困難であるか、結果として従来の研究がいかにそれがもつ問題を見落としてきたかという点である。古典語という過去の言語体系に対しては、研究者の内省だけでは予想以上に理解の及ばない点のあることを認めねばなるまい。本稿では、前半で、n グラム統計処理を用いた文字列相互比較という、全く新しい分析方法を、文学作品の表現研究方法として提案したが、この手法が内省を助け、時にそれを超える手段となり得ることは、いくつかの結果からも明かであろう。特にn グラム統計処理にcommを組み合わせたn グラム集合演算法を用いるならば、今回のような分析に限らず、例えば、貫之集と躬恒集の共通文字列をすべて自動的に取り出す、古今集と源氏物語の共通文字列をすべて自動的に取り出す、和泉式部集と和泉式部日記の共通文字列をすべて自動的に取り出す、清輔集と奥義抄の共通文字列をすべて自動的に取り出す、など、和歌・散文を自由に組み合わせて、相互に大量に比較研究する事が容易に実現できる訳であり、文学研究に、従来と異なる成果をもたらすことが期待できるだろう。稿者としては今後この分析方法を、古典文学研究に応用することを進めていきたいと思っている。

* 引用した和歌の本文・歌番号は、勅撰集は『新編国歌大観』、万葉集は小学館新編日本古典文学全集『万葉集』①～④による。ただし、和歌の表記は、適宜漢字をあてるなど改めた箇所がある。

注

- (1) 長瀬真理「日本語－英語対照「源氏物語」のテキスト・データベース」東京大学大型計算機センター、長瀬真理「日本語－英語「源氏物語」のテキスト・データベースの作成に関する

基礎的研究」(「情報知識学会機関誌」創刊号、1990年)

- (2) 和歌文学関係で、オンラインで提供されているものを挙げておく。国文学研究資料館の二十一代集検索、日本古典文学本文データベース(実験版)試験公開(1999年4月から。ただし現在の所、2年間の限定付きになっている)。吉村誠『万葉集検索(試作版)』山口大学教育学部(URL=http://dtkws01.ertc.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~kokugo/ma_ser.html)、重田仁美『平安時代私家集』(URL=http://member.nifty.ne.jp/sigeta/)、詠歌年代順に再編成した私家集データ、遍昭・敏行・素性・興風・友則・伊勢・貫之他、寿永百首家集の注釈や後葉・統詞花の作者索引などをのせる。ダウンロード可)、近藤みゆき『相模集データベース』(URL=http://www.l.chiba-u.ac.jp/~mkondo、流布本系相模集のK W I C索引。文脈付き単語検索可。CD-ROM版は文部省科学研究費重点領域研究「人文科学とコンピュータ」『じんもんこんDATABASE』vol.1(1998年3月)で公開)
- またその他、古今集や竹取物語など代表的な作品のデータベースをフロッピー・ディスク版で提供する、ピー・エス・データが1993年から勉強社で開始されている。
- (3) 国文学研究資料館データベース古典コレクション『二十一代集[正保版本]CD-ROM』(中村康夫・立川美彦・杉田まゆ子監修、岩波書店・1999年7月)、同『源氏物語(絵入)〔承応版本〕CD-ROM』(中村康夫・立川美彦・田中夏陽子監修、岩波書店・1999年7月)
- (4) 『源氏物語』CD-ROM 角川古典大観(角川書店・1999年11月)
- (5) 『新編国歌大観』CD-ROM版(角川書店・1996年8月)
- (6) 山崎真由美、竹田正幸、福田智子、南里一郎「和歌データベースからの類似歌の自動抽出」(情報処理学会「人文科学とコンピュータ」研究報告、Vol.98、No.97、1998年)
- (7) 竹田正幸、福田智子、南里一郎、山崎真由美「和歌データベースにおける特徴パターンの発見」(『情報処理学会論文誌』Vol.40、No.3、1999年3月)
- (8) 後藤祥子「女流による男歌一式子内親王歌への一視点」(初出 関根慶子博士顕賞会編『平安文学論集』風間書房・1992年10月、久富原玲編『和歌とは何か』有精堂・1996年10月に再録)
- (9) 平安文学でこの論を継承発展するものに、久富原玲「和歌とは何か・総論」(注(8)著書)、小嶋菜温子「恋歌とジェンダー-業平・小町・遍昭」(『国文学』特集「恋歌-古典世界の」学燈社・1996年10月)などがあり、また万葉の女歌論から同論に言及するものに、青木生子「女歌の意味するもの」(全国大学国語国文学会編『文学・語学』155号「講演特集」1997年5月)などがある。
- (10) 山口仲美『平安朝の言葉と文体』(風間書房・1998年6月)、第一部・第三章「『源氏物語』の女性語」
- (11) 形態素解析を、計算機で自動化する試みは、残念ながら古典語に関してはまだまだ少ない。ただし現代語に関しては、工学系で多くの研究がなされている。特に同じnグラム統計処理を応

用した新しい研究として、次の様なものがある。「形態素構文解析」(内元清貴・馬青、『人文学と情報処理』No21「特集自然言語処理のすべて」1999年4月、勉誠出版)、「文字クラスモデルによる日本語単語分割」(小田裕樹、森信介、北研二、『自然言語処理』Vol. 6・No7、1999年10月、言語処理学会)。これらの研究成果の応用によって、古典語の形態素解析の自動化にも可能性が開けるものと考えられる。

- (12) 長尾眞・森信介、「大規模日本語テキストの n グラム統計の作り方と語句の自動抽出」(『自然言語処理』96-1、1993)
- (13) Claude E. Shannon & Warren Weaver, The Mathematical Theory Of Communication, The University Of Illinois Press, 1949年
- (14) なお、n グラム統計処理と長尾・森プログラムの古典分析への応用については、近藤泰弘「n グラム統計から見た古典語テキスト」(『第四回 シンポジウム コンピュータ国文学 講演集』(平成11年10月 国文学研究資料館)、近藤みゆき「平安時代和歌資料における特殊語彙抽出についての計量的研究と利用ツールの公開」(『特定領域研究「人文科学とコンピュータ」1998年度研究成果報告書」及川昭文編、1993年3月)も参照されたい。
- (15) 今回左注より $m \cdot f$ として取り扱ったものを歌番号で一覧しておく。 $m = 7 \cdot 1 \ 2 \ 5 \cdot 1 \ 3 \ 5 \cdot 2 \ 1 \ 1 \cdot 2 \ 2 \ 2 \cdot 2 \ 8 \ 3 \cdot 3 \ 3 \ 4 \cdot 4 \ 0 \ 9 \cdot 6 \ 2 \ 1 \cdot 6 \ 7 \ 1 \cdot 7 \ 0 \ 2 \cdot 7 \ 2 \ 0 \cdot 8 \ 6 \ 6 \cdot 8 \ 9 \ 3 \cdot 8 \ 9 \ 4 \cdot 8 \ 9 \ 5 \cdot 8 \ 9 \ 9 \cdot 9 \ 0 \ 7 \cdot 9 \ 7 \ 4 \cdot 1 \ 1 \ 0 \ 8$ 番、 $f = 3 \ 7 \ 5 \cdot 4 \ 1 \ 2 \cdot 6 \ 6 \ 4 \cdot 7 \ 0 \ 3 \cdot 9 \ 5 \ 9 \cdot 9 \ 7 \ 3 \cdot 9 \ 9 \ 4$ 番。なお、データ整理にあたっては杉山美都子(千葉大学文学部日本文化学科 平成10年度卒業生)の協力を得た。
- (16) 文学作品等を n グラム統計で計量する場合、n を 1 グラムずつ増加させていくと、ある段階ですべての文字列の出現頻度が 1 となる段階を迎える。今回の古今集を例にとれば、男性では 13 グラム、女性では 19 グラム、読人不知では 25 グラムで出現頻度が 1 となった。このようにすべての文字列の出現頻度が 1 となると、それ以降は、たとえば男性 13 グラム「ををみなへしうしろめたくも」→14 グラム「ををみなへしうしろめたくもみ」→15 グラム「ををみなへしうしろめたくもみゆ」と、実態としては、既に出現している各文字列が 1 字 (1 グラム) ずつ増加していくにすぎなくなるのである。このような文字列出現頻度がすべて 1 になる段階を、稿者は仮に「n グラムの飽和」と称している。飽和値は、対象となる作品によって異なっており、作品の文体などを考える上でも目安になると考えられる。この点に関しては、近藤みゆき注(14)で言及している。
- (17) 今回、このような範囲とした理由を補足しておく。①は、「2. 3 計量化される様々な表現」で述べたことと関連する。すなわち、1 グラムでは大半が 1 文字を追うに過ぎず、2 グラムでは、男性特有文字列は 1000 以上にもものぼるのだが、元来基礎的語彙が多い中での差分となると「あげ・あた・あづ……」と意味のない文字列が大半となってしまう、これらを範囲に

含めても、今回の場合はあまり意義を認められない。一方、8グラム以上になると、類歌や特定歌人の歌風、歌人同士の影響関係として扱うべき内容のものが多くを占めるようになり、論ずべき問題の質が異なってくる。性差を反映した「ことば」を把握する導入論としては、標準的な歌語や特徴的連語の集中する3〜7グラムの範囲を挙げてみるのが、まずは有効と判断した。②は、女性歌特有の「ことば」は今回は扱わないということにもなるのだが、これは③とも関連する。今回の古今集では、男・女・読人不知の歌数は、男性歌人-595首、女性歌人-87首、読人不知-429首となっており、女性歌が100首を割り込んでおり、全体量の少なさから、その特有の文字列が、ほとんどが出現頻度1になってしまうのである。たとえば、次に挙げるのが、女性特有文字列のn=5の「あ」で始まる文字列の一部である。

1 あかれやは、1 あきのもみ、1 あきのよも、1 あけぬるも、1 あさぢには、1 あさつゆの、
1 あさなげに、1 あさなわが、1 あしたゆく、1 あしもやす、1 あぢきなし、1 あはむつき

実は、これら1度しか現れない表現でも、万葉との比較や次世代での変遷もあわせて丹念に検討すると、女性の「ことば」の型の固有性を考察する手がかりになるものは少なくない。これは男性特有の表現においても同様で、後述のように、たとえ出現頻度1や2の「ことば」でも、差分として残ったものの中には、重要な意義をもつ例も散見する。一つ一つの「ことば」の重みにおいて、勅撰和歌集の和歌という厳選された作品のそれは、散文と同列ではないことが改めて実感されるのだが、総合的な統計結果に拠った最初の報告である本稿では、差分として抽出され、かつ出現頻度の高いものに、まず注目する方針を取ることにした。

- (18) なお、今回の男性の「ことば」のうち、女性とは重ならず読人不知とのみ共通して用いられている「ことば」(2.4回D部)は、今回の統計に含めている。「古今和歌集男性特有表現一覧」では、男性・読人不知それぞれでの用例数を表示したので、適宜参照願いたい。
- (19) 『八代集総索引』(ひめまつ会編・大学堂書店・1986年12月)
- (20) 後藤祥子注(8)論文
- (21) 古今集の「女郎花」歌は全19首。うち3首が読人不知歌だが、同3首は巻十九雑林に配列されており、秋上のそれを構成するのは、すべて男性歌となっている。
- (22) 平安末までの用例を新編国歌大観CD-ROMで検索・通覧すると、女性が女郎花や藤袴をよんだ例は限られている。特に女郎花は、平安期全般を通じてコンスタントに詠まれ全体量が多いにも関わらず、女性の詠作は驚くほど少数で、かつ場が限定されている。伊勢・中務では、屏風歌か、でなければ男性が「女郎花」をよんでよこした歌への返歌。次世代の女流、小大君や馬内侍の家集での用例も、内容に当たると相手の男性からの歌が記しとどめられているに過ぎない。和泉式部集でも、百首歌や連作での用例か、花山院歌合の「女郎花」題の作例がいくつかある程度だが、ただ、やや異色な用例として、相模とともに前栽の草花を詠んだ「前栽のおもしろきを見て、いひあつめたる」の連作がある。女性どうしが庭の草花、

そして女郎花を楽しんだ例として、他に、大斎院前御集296～300番の唱和がある。こうした女性どうしの風流という場合を除くと、進んで女郎花を詠む女性は無く、贈答歌においてかなり奔放に様々な歌ことばを使用する相模などでも、家集での用例は、小一条院歌合「女郎花」題一首と、初事百首中一首の2例にとどまっている。男性本位のセクシャルな視線を内在させる歌語として、女性には厭われたと言えようか。ところで、こうした女流歌人全般の用例の現実と比べて、特異なのが『源氏物語』である。源氏では、無論男性側の用例は多いのだが、女が、贈答に応えたものではなく、あえて自らを喩えて男に詠みかけた例がある。野分巻の玉鬘（自分を喩える）、夕霧巻の一条御息所（娘を女郎花に喩える）である。前者は源氏の懸想をかわそうとする玉鬘の歌、後者は娘の運命を案じ、病を押して母御息所が夕霧に送った手紙の歌である。特殊な状況下、その特殊性を象徴するかのようになり、性差と「ことば」の古今的秩序を破った詠歌がなされる訳である。『源氏物語』では、性差とことばの古今的秩序に反する歌が、他にも散見し、その点でも、他の物語の和歌とは異なっている。虚構の世界で男性の立場・女性の立場を詠み分ける物語和歌に関しては、性差を反映した「ことば」の型の観点からも、今後論ずべき点が多いと考える。なお『伊勢集』の女郎花については、河添房江『伊勢集』の秋草の歌（『和歌文学大系18 小町集／業平集／遍昭集／素性集／伊勢集／猿丸集』1998年10月、明治書院、月報7）がある。

- (23) 性別からみた夏虫の用例の中で、大きく揺れがあるのが後撰集・夏部の「つつめども隠れぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」（209・読人不知）である。同歌、詞書に、「桂のみこの「ほたるをとらへて」と言い侍ければ、わらはのかざみの袖につつみて」とあり、螢を夏虫と詠んだ例なのだが、古来作者については、同歌が『大和物語』四十段では、桂みこ（宇多天皇女学子内親王）に仕える女童が、内親王のもとに通う敦慶親王に思いをかけて詠んだ歌として伝えられることもあって、この「童」を男性とする説、女性とする説の両説があり一定しない。近年の注では、片桐洋一（新日本古典文学大系『後撰和歌集』1990年4月、岩波書店）は男性説を、工藤重矩（和泉古典叢書『後撰和歌集』1992年9月、和泉書院）は女性説を立てているが、解釈の揺れを提示した元祖は『古来風躰抄』である。『古来風躰抄』では、「また、一説に」として『大和物語』と同じ女童の恋の話を載せるが、後撰集歌の解釈としては、作者について「うなる童男なり」と注記し、詞書本文まで、女童の衣裳「かざみ」ではなく、男性の衣裳「狩衣」とするなど、これをあくまで男性歌として扱っている。夏虫の喩は男性という、俊成の、歌ことばをめぐる性差感覚の反映といえるかもしれない。
- (24) 佐佐木幸綱「万葉集〈女歌〉考」（『上代文学』76号、1996年4月）
- (25) 阿蘇瑞枝「万葉集の女歌—大伴坂上郎女とその前後—」（『上代文学』76号、1996年4月）

謝辞

本研究にあたっては、長尾眞先生（京都大学総長）、森信介氏（日本アイ・ビー・エム東京基礎研究所）のご好意により、両氏の開発になるnグラム統計を高速に算出するソフトウェアを利用させていただくことができた。また、特に長尾先生からは、古典文学研究にnグラム統計を用いることについて多大なご示唆をいただいた。あわせて、本稿の一部は、国文学研究資料館「データベース研究会」での研究報告（1999年7月30日）をもととしており、その際、中村康夫先生（データベース室長）はじめ、諸先生方から貴重なご意見をいただいた。ここに記して、深く感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成9・10年度、文部省科学研究費補助金・重点領域（10年度は特定領域研究に変更）「人文科学とコンピュータ」データベース・公募班・課題名「平安時代和歌資料における特殊語彙抽出についての計量的研究と利用ツールの公開」の補助を受けたものである。

（補注）

脱稿から校正までの間に、nグラムを含む、言語の確率的モデルについての概論である次の文献が刊行された。

北 研二『確率的言語モデル』（東京大学出版会・1999年11月）

今後の方向性を示すものとして注目されるものである。

古今和歌集男性特有表現一覧

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
1	をみなへし	16	0	3
2	こころを	14	0	8
3	しらゆき	13	0	1
4	みだれ	13	0	6
5	もみちば	13	0	9
6	ながれ	12	0	0
7	まさり	12	0	0
8	むかし	12	0	6
9	よしの	12	0	15
10	うめのはな	11	0	7
11	こひしき	11	0	12
12	あきのの	10	0	4
13	かりける	10	0	0
14	ならなくに	10	0	2
15	しらくも	9	0	1
16	とおもひ	9	0	2
17	もあるか	9	0	4
18	かりけり	8	0	3
19	しらつゆ	8	0	4
20	たれか	8	0	1
21	にしき	8	0	2
22	あしひきの	7	0	12
23	あしひきのやま	7	0	12
24	あづさゆみ	7	0	6
25	あまのかは	7	0	2
26	ありけれ	7	0	3

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
27	おもほえ	7	0	1
28	かみなづき	7	0	3
29	くもあるか	7	0	0
30	しなれば	7	0	1
31	ぞちりける	7	0	6
32	たつたがは	7	0	2
33	ちはやぶる	7	0	3
34	みやま	7	0	2
35	あかず	6	0	5
36	あるかな	6	0	3
37	いはむ	6	0	3
38	いろまさり	6	0	0
39	おもへども	6	0	6
40	からに	6	0	3
41	こひしかり	6	0	2
42	こひしかる	6	0	1
43	しらたま	6	0	1
44	しらやま	6	0	0
45	たなばた	6	0	0
46	ちとせ	6	0	4
47	つれなき	6	0	1
48	なければ	6	0	3
49	なみだがは	6	0	2
50	にけるかな	6	0	1
51	はるのやま	6	0	0
52	よしののやま	6	0	5

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
53	あふこと	5	0	7
54	あらたま	5	0	1
55	いろにいで	5	0	3
56	うつせみ	5	0	4
57	おとはやま	5	0	0
58	おもふこころ	5	0	2
59	かけて	5	0	3
60	かたみ	5	0	4
61	かよひぢ	5	0	0
62	かれぬ	5	0	2
63	きのふ	5	0	3
64	くもある	5	0	0
65	くもゐ	5	0	2
66	こころぞ	5	0	0
67	しるひと	5	0	2
68	たまのを	5	0	2
69	ちはやぶるかみ	5	0	0
70	なきひと	5	0	4
71	なびく	5	0	2
72	にこそありけれ	5	0	3
73	にほひ	5	0	2
74	はなぞちりける	5	0	0
75	はるのやまべ	5	0	0
76	ひとつ	5	0	4
77	ふくかぜ	5	0	6
78	まさりける	5	0	0
79	まにまに	5	0	1
80	みだれて	5	0	5

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
81	やどの	5	0	4
82	やまかぜ	5	0	0
83	やまたかみ	5	0	2
84	やまのさくら	5	0	1
85	やまのは	5	0	2
86	よろづ	5	0	2
87	よろづよ	5	0	2
88	わかな	5	0	3
89	わすれぐさ	5	0	2
90	わたらむ	5	0	2
91	あかぬ	4	0	1
92	あきぎり	4	0	3
93	あきはぎ	4	0	5
94	あだな	4	0	2
95	あらし	4	0	1
96	いつか	4	0	0
97	いづら	4	0	1
98	おもひき	4	0	0
99	おもほゆ	4	0	2
100	おもほゆるかな	4	0	1
101	がてに	4	0	2
102	きりぎりす	4	0	2
103	くれて	4	0	2
104	けふは	4	0	0
105	こひは	4	0	0
106	こひも	4	0	3
107	こふる	4	0	3
108	ころかな	4	0	1

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
109	さける	4	0	4
110	さとは	4	0	4
111	さむみ	4	0	0
112	しげき	4	0	3
113	すみのえ	4	0	2
114	そばち	4	0	1
115	そめけむ	4	0	2
116	たなびく	4	0	1
117	ちかく	4	0	4
118	ちぐさ	4	0	2
119	つひに	4	0	2
120	つもり	4	0	1
121	つもれ	4	0	1
122	ところ	4	0	0
123	なかりせば	4	0	0
124	ぬべし	4	0	2
125	はかなく	4	0	0
126	はつしも	4	0	0
127	はるか	4	0	2
128	はるさめ	4	0	4
129	ふぢばかま	4	0	0
130	まどひ	4	0	2
131	みえな	4	0	0
132	みえぬ	4	0	2
133	みえね	4	0	0
134	むかしの	4	0	1
135	やまのもみぢ	4	0	0
136	わけて	4	0	3

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
137	わびびと	4	0	0
138	あきのこのは	3	0	1
139	あはで	3	0	0
140	あはむ	3	0	4
141	あふよ	3	0	4
142	あふよし	3	0	1
143	あへぬ	3	0	0
144	あまのかはら	3	0	2
145	あやまたれける	3	0	0
146	あらたまのとし	3	0	0
147	ありあけ	3	0	0
148	あれど	3	0	4
149	いたく	3	0	1
150	いまこむと	3	0	0
151	いまぞ	3	0	2
152	いまも	3	0	3
153	うちつけ	3	0	0
154	うちつけに	3	0	0
155	おとづれ	3	0	1
156	おほかた	3	0	2
157	おほかたは	3	0	1
158	おもはぬ	3	0	5
159	おもふころは	3	0	1
160	おもふひと	3	0	2
161	かぎりと	3	0	1
162	かくすらむ	3	0	0
163	かぜふく	3	0	0
164	かとぞみる	3	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
165	かとのみ	3	0	0
166	かへるやま	3	0	0
167	かよふ	3	0	0
168	かりがね	3	0	2
169	かりけれ	3	0	1
170	かりそめ	3	0	0
171	かるべき	3	0	1
172	きくのはな	3	0	0
173	きつつ	3	0	0
174	きみをのみ	3	0	0
175	くものい	3	0	0
176	くるしき	3	0	3
177	けふに	3	0	0
178	ここら	3	0	1
179	こころから	3	0	0
180	こそわたれ	3	0	1
181	ごとく	3	0	1
182	ことならば	3	0	1
183	ごとも	3	0	0
184	こひしきものを	3	0	1
185	こひもするかな	3	0	3
186	こひやわたらむ	3	0	1
187	こひわたる	3	0	1
188	こほり	3	0	3
189	こよひ	3	0	4
190	さかり	3	0	3
191	さきにけり	3	0	0
192	さくらばなちる	3	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
193	さびし	3	0	0
194	さへぞ	3	0	1
195	さへや	3	0	1
196	さみだれ	3	0	0
197	しらねど	3	0	0
198	しらねども	3	0	0
199	しられぬ	3	0	0
200	そのかみ	3	0	2
201	そめし	3	0	1
202	たちかへり	3	0	2
203	たちわかれ	3	0	0
204	たむく	3	0	0
205	たむけ	3	0	0
206	ちらす	3	0	0
207	ちりぬる	3	0	1
208	つきかげ	3	0	2
209	つもれる	3	0	1
210	てるひ	3	0	0
211	とこたへよ	3	0	0
212	としごと	3	0	0
213	としごとに	3	0	0
214	とてか	3	0	0
215	ながらへて	3	0	0
216	なかりけり	3	0	0
217	なきこそ	3	0	1
218	なきこそわたれ	3	0	0
219	なくこそ	3	0	1
220	なくなる	3	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
221	なくね	3	0	0
222	なにはの	3	0	0
223	なみだなり	3	0	2
224	ならで	3	0	1
225	なりな	3	0	2
226	なりにけり	3	0	1
227	なれど	3	0	1
228	にしられぬ	3	0	0
229	ばかりぞ	3	0	0
230	はつしもの	3	0	0
231	はなすすぎほに	3	0	0
232	はなのかげ	3	0	0
233	はるがすみたち	3	0	1
234	はるくれば	3	0	0
235	はるのの	3	0	0
236	はるのひ	3	0	0
237	ひととせ	3	0	1
238	ふかき	3	0	4
239	ふかくさ	3	0	0
240	ふるなみだ	3	0	1
241	ほととぎすなく	3	0	0
242	ほにいでて	3	0	1
243	ほのか	3	0	0
244	まさりけり	3	0	1
245	まされる	3	0	0
246	まじり	3	0	1
247	まだき	3	0	2
248	まよふ	3	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
249	みえし	3	0	0
250	みえず	3	0	2
251	みどり	3	0	1
252	みねに	3	0	1
253	みのう	3	0	2
254	めづらし	3	0	2
255	めもはる	3	0	0
256	ものをおもふ	3	0	1
257	やまがくれ	3	0	0
258	やまだ	3	0	2
259	やまち	3	0	0
260	やまぶき	3	0	3
261	ゆきふれば	3	0	0
262	ゆくらむ	3	0	0
263	よしのがは	3	0	2
264	よそにのみ	3	0	0
265	よをさむみ	3	0	0
266	わがこころ	3	0	1
267	わがごと	3	0	2
268	わがこひは	3	0	1
269	わびしき	3	0	0
270	われさへ	3	0	0
271	をしむ	3	0	1
272	あかし	2	0	0
273	あかずして	2	0	2
274	あかで	2	0	1
275	あきくれど	2	0	0
276	あきのやま	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
277	あきはかぎり	2	0	0
278	あきはかぎり	2	0	0
279	あきはぎのはな	2	0	0
280	あけぬとて	2	0	0
281	あさぎり	2	0	1
282	あさま	2	0	0
283	あさみ	2	0	1
284	あだなる	2	0	0
285	あだなるもの	2	0	0
286	あだなるものと	2	0	0
287	あたる	2	0	0
288	あづきゆみはる	2	0	0
289	あはまし	2	0	0
290	あふさかのせき	2	0	1
291	あふよしもがな	2	0	0
292	あまつそら	2	0	1
293	あまびこ	2	0	0
294	あまびこの	2	0	0
295	あめふれば	2	0	0
296	ありあけのつき	2	0	0
297	ありとはきけど	2	0	0
298	ありながら	2	0	0
299	いかにして	2	0	0
300	いくか	2	0	1
301	いそのかみふる	2	0	1
302	いづこ	2	0	2
303	いつしか	2	0	0
304	いつしかと	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
305	いづち	2	0	1
306	いづちゆくらむ	2	0	0
307	いづれ	2	0	0
308	いでじ	2	0	1
309	いでつ	2	0	0
310	いでぬ	2	0	2
311	いにしへ	2	0	0
312	いふなり	2	0	0
313	いろにはいでじ	2	0	1
314	いろのちぐさに	2	0	1
315	いろもかも	2	0	0
316	うきくさのうき	2	0	0
317	うきとき	2	0	1
318	うちはへ	2	0	1
319	うちはへて	2	0	0
320	うのはな	2	0	1
321	うらみても	2	0	0
322	おいにける	2	0	0
323	おいにけるかな	2	0	0
324	おいらく	2	0	0
325	おくしも	2	0	0
326	おくしらつゆ	2	0	1
327	おくはつしも	2	0	0
328	おくやま	2	0	4
329	おとにきぎつつ	2	0	0
330	おなじ	2	0	2
331	おほかる	2	0	0
332	おほかるのべ	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
333	おほかるのべに	2	0	0
334	おもはず	2	0	0
335	おもはぬとき	2	0	0
336	おもはまし	2	0	0
337	おもはむひと	2	0	0
338	おもひおき	2	0	0
339	おもひきや	2	0	0
340	おもひきゆ	2	0	0
341	おもひきゆらむ	2	0	0
342	おもひけむ	2	0	0
343	おもひける	2	0	0
344	おもひけるかな	2	0	0
345	おもひこし	2	0	0
346	おもひそめ	2	0	0
347	おもひぬる	2	0	0
348	おもふころかな	2	0	0
349	おもほえなくに	2	0	0
350	かぎりは	2	0	1
351	かくしつつ	2	0	2
352	かくれぬのした	2	0	0
353	かさとり	2	0	0
354	かすがのの	2	0	1
355	かぜのおと	2	0	1
356	かぜふくごと	2	0	0
357	かぜふくごとに	2	0	0
358	かなしかり	2	0	1
359	かなしき	2	0	9
360	かなしけれ	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
361	かむなび	2	0	3
362	かよひて	2	0	0
363	かよへる	2	0	0
364	からくれなゐ	2	0	1
365	かれなく	2	0	0
366	かれなくに	2	0	0
367	きえかへり	2	0	0
368	ききわたる	2	0	0
369	きみがため	2	0	0
370	きみこふる	2	0	0
371	きりぎりすなく	2	0	0
372	くさき	2	0	0
373	くさのうへ	2	0	1
374	くさのは	2	0	1
375	くさば	2	0	2
376	くさもきも	2	0	0
377	くもり	2	0	2
378	くらす	2	0	0
379	くらぶのやま	2	0	0
380	くらぶやま	2	0	0
381	くれたけ	2	0	1
382	くれたけの	2	0	1
383	くれたけのよよ	2	0	0
384	くれど	2	0	1
385	けふにや	2	0	0
386	けふの	2	0	0
387	けふや	2	0	0
388	けらし	2	0	1

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
389	こえくれば	2	0	0
390	こえぬべらなり	2	0	0
391	こぎたれて	2	0	0
392	こころかな	2	0	0
393	こころなり	2	0	0
394	こころなりけり	2	0	0
395	こころをひとに	2	0	0
396	こしぢ	2	0	0
397	こしのしらやま	2	0	0
398	こそかなしけれ	2	0	0
399	こそみえね	2	0	0
400	このもと	2	0	1
401	こひしかりける	2	0	1
402	こひしかるべき	2	0	1
403	こひしと	2	0	0
404	こひつつ	2	0	1
405	こひはし	2	0	2
406	こひむと	2	0	1
407	こまつ	2	0	0
408	ころもで	2	0	2
409	こゑきげば	2	0	1
410	さきけり	2	0	0
411	さきそめ	2	0	0
412	さきそめし	2	0	0
413	さくはな	2	0	1
414	さくらむ	2	0	0
415	ささのは	2	0	2
416	ささのはにおく	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
417	さだめ	2	0	4
418	さびしく	2	0	0
419	さびしくも	2	0	0
420	さほの	2	0	0
421	さみだれのそら	2	0	0
422	さむく	2	0	0
423	さやか	2	0	1
424	さやかに	2	0	1
425	さよふけて	2	0	1
426	ざりけり	2	0	2
427	しかど	2	0	0
428	したにかよひて	2	0	0
429	したば	2	0	1
430	しづこころ	2	0	0
431	しのび	2	0	0
432	しらかは	2	0	0
433	しらぎく	2	0	0
434	しらくものたえ	2	0	0
435	しらまし	2	0	0
436	しられず	2	0	0
437	しりぬる	2	0	0
438	しるく	2	0	0
439	しるべく	2	0	0
440	しるらむ	2	0	0
441	しるらめ	2	0	4
442	しるらめや	2	0	3
443	しれぬ	2	0	1
444	しろたへ	2	0	2

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
445	しろたへの	2	0	2
446	しろたへのそで	2	0	0
447	すぎがて	2	0	0
448	すぎがてに	2	0	0
449	すまむ	2	0	0
450	すみか	2	0	2
451	すみぞめ	2	0	2
452	すみのえのきし	2	0	1
453	すみのえのまつ	2	0	1
454	せみのは	2	0	0
455	せみのはの	2	0	0
456	そらもとどろ	2	0	0
457	そらもとどろに	2	0	0
458	それともみえず	2	0	0
459	たかさご	2	0	1
460	たかさごの	2	0	1
461	たがため	2	0	0
462	たぐへて	2	0	0
463	たちいで	2	0	0
464	たちいでて	2	0	0
465	たちかくす	2	0	0
466	たちなむ	2	0	0
467	たちばな	2	0	3
468	たつたのやま	2	0	1
469	たつたのやまの	2	0	0
470	たなびくやまの	2	0	1
471	たびね	2	0	1
472	たむくる	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
473	たれかしらまし	2	0	0
474	たれかは	2	0	0
475	ちぐさに	2	0	0
476	ちよに	2	0	3
477	ちよも	2	0	0
478	ちらず	2	0	0
479	ちらなむ	2	0	0
480	ちらばちらなむ	2	0	0
481	ちりなむのち	2	0	0
482	ちるはなごと	2	0	0
483	ちるはなごと	2	0	0
484	つきのかつら	2	0	0
485	つくからに	2	0	1
486	つれもなきひと	2	0	2
487	といふなる	2	0	0
488	ときなき	2	0	0
489	としのうち	2	0	0
490	としふる	2	0	0
491	としふれ	2	0	0
492	としふれば	2	0	0
493	とぞなく	2	0	1
494	とどめむ	2	0	3
495	とどめよ	2	0	0
496	とのみぞ	2	0	2
497	とのみふる	2	0	0
498	とはきけ	2	0	0
499	とはきけど	2	0	0
500	とはなしに	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
501	とまらぬ	2	0	0
502	とまるべく	2	0	0
503	とみゆらむ	2	0	0
504	とみるまで	2	0	0
505	ともみえず	2	0	0
506	とやいはむ	2	0	2
507	とやみむ	2	0	0
508	なかなか	2	0	0
509	なかなかに	2	0	0
510	なかりける	2	0	0
511	なきころ	2	0	0
512	なきわたる	2	0	2
513	なくしかの	2	0	2
514	なくなみだ	2	0	0
515	なつくさ	2	0	0
516	なつごろも	2	0	0
517	なつむし	2	0	1
518	なとりがは	2	0	1
519	なにはがた	2	0	0
520	なにをうしと	2	0	0
521	なにをか	2	0	1
522	なのたつ	2	0	1
523	なみだなりけり	2	0	0
524	なりなむ	2	0	0
525	なりにける	2	0	1
526	なりにけるかな	2	0	1
527	なりにし	2	0	1
528	なりまさる	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
529	ぬぎかけし	2	0	0
530	ぬしやたれ	2	0	0
531	ぬしやたれと	2	0	0
532	はぎのはな	2	0	0
533	はつしものおき	2	0	0
534	はなのかげかは	2	0	0
535	はなより	2	0	0
536	はるたてば	2	0	1
537	はるるとき	2	0	1
538	はるるときなき	2	0	0
539	ひごと	2	0	2
540	ひさかたのあま	2	0	2
541	ひさかたのつき	2	0	0
542	ひさし	2	0	2
543	ひとさへ	2	0	0
544	ひとしる	2	0	2
545	ひとしるらめや	2	0	2
546	ひとしれぬ	2	0	2
547	ひとだのめ	2	0	0
548	ひとだのめなる	2	0	0
549	ひとたび	2	0	0
550	ひととせに	2	0	1
551	ひとにしられぬ	2	0	0
552	ひとのかたみ	2	0	0
553	ひとのかたみか	2	0	0
554	ひとのころを	2	0	1
555	ひとはいさ	2	0	0
556	ひとりのみ	2	0	0

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
557	ひとをおもひ	2	0	0
558	ひとをおもふ	2	0	2
559	ひろひおきて	2	0	0
560	ふくからに	2	0	0
561	ふくごと	2	0	0
562	ふくらむ	2	0	0
563	ふみわけ	2	0	4
564	ふみわけて	2	0	3
565	ふゆくさ	2	0	0
566	ふゆごもり	2	0	0
567	ふゆながら	2	0	0
568	ふりしく	2	0	0
569	ふりしけ	2	0	1
570	ふりつつ	2	0	2
571	へだつ	2	0	0
572	ほころび	2	0	0
573	まがき	2	0	2
574	まがふ	2	0	0
575	まさらじ	2	0	0
576	まさるな	2	0	1
577	まつはれ	2	0	0
578	まつやま	2	0	2
579	まどふ	2	0	3
580	みえなむ	2	0	0
581	みえねど	2	0	0
582	みえわたる	2	0	0
583	みえわたるかな	2	0	0
584	みかき	2	0	3

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
585	みかさのやま	2	0	0
586	みだる	2	0	1
587	みだれむ	2	0	0
588	みちのく	2	0	3
589	みづのあわ	2	0	0
590	みづのおも	2	0	0
591	みなと	2	0	1
592	みむひと	2	0	0
593	みもせぬ	2	0	0
594	みやき	2	0	0
595	みるま	2	0	0
596	みるまで	2	0	0
597	みるらむ	2	0	0
598	めもはるに	2	0	0
599	ものおもひもな	2	0	0
600	ものならなくに	2	0	0
601	ものゆゑ	2	0	3
602	もものはな	2	0	0
603	もやすると	2	0	0
604	もゆる	2	0	1
605	やあはれと	2	0	0
606	やたれ	2	0	0
607	やちよ	2	0	3
608	やどのはな	2	0	1
609	やなぎ	2	0	0
610	やまがは	2	0	1
611	やまのかひ	2	0	1
612	やまびこ	2	0	2

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
613	ゆきかふ	2	0	0
614	ゆきふみわけ	2	0	0
615	ゆきふみわけて	2	0	0
616	ゆふぐれ	2	0	5
617	ゆふづくよ	2	0	1
618	よただなく	2	0	0
619	よどみ	2	0	0
620	よにこそ	2	0	1
621	よのうき	2	0	3
622	よひよひ	2	0	0
623	よふけ	2	0	1
624	よふけて	2	0	1
625	よよに	2	0	0
626	よるこそ	2	0	0
627	よるなみ	2	0	0
628	よをへて	2	0	0
629	わがおもふ	2	0	1
630	わがおもふひと	2	0	1
631	わがごとく	2	0	1
632	わがころも	2	0	1
633	わがころもで	2	0	0
634	わかず	2	0	0
635	わかなつみ	2	0	2

	文字列 (語彙)	男性	女性	読人 不知
636	わかぬ	2	0	1
637	わがみひとつ	2	0	1
638	わがやどのはな	2	0	1
639	わかると	2	0	1
640	わかるるなみだ	2	0	0
641	わかれし	2	0	1
642	わかれて	2	0	0
643	わきてをらまし	2	0	0
644	わびしかり	2	0	1
645	わびしけれ	2	0	0
646	わびしら	2	0	0
647	わびしらに	2	0	0
648	わびて	2	0	2
649	わぶと	2	0	0
650	わぶとこたへよ	2	0	0
651	われなれや	2	0	0
652	われのみ	2	0	1
653	われも	2	0	3
654	をしければ	2	0	0
655	をとほ	2	0	0
656	をとめ	2	0	0
657	をらまし	2	0	0
658	をりつる	2	0	0

